巨人の名残り
――中世イスラーム世界における巨人伝承――

山中由里子
国立民族学博物館

要旨

中世イスラーム世界の博物誌、歴史書などに含まれる驚異譚では、巨大な骨やいつだれが建てたか分からない遺跡の発見が巨人族の伝承と結び付けられた。いくつか事例を紹介し、そこに見られる当時の人々の宗教観と人類史観に触れる。

本稿では、中世イスラーム世界において、巨大な骨や、いつ誰が造ったか分からない建造物の廃墟といった物質がどのようなエージェンシー（行為主体性）をもって巨人伝承につながったか、あるいは逆に巨人にまつわる伝承がどのようなモノや場所と結びついたかを考察する。対象とするのは、アラビア語やペルシア語で書かれた旅行記・博物誌のテクストに含まれる巨人と見做された民族や、巨人のものとされた遺物にまつわる目撃譚や記録である。

中世イスラーム世界の人々が持っていた巨人観の基層には聖典『クルアーン』や諸預言者伝集といった宗教テクストにおける巨人の表象がある。それらに見られる巨人像には、「神に滅ぼされた民」、「遺跡を残した太古の民」、「退治されてしまう先住民」といった側面が見られる。

宗教テクストにおいては、神によって根絶されてしまった民族という教訓的な存在として現れる一方で、この太古の昔に滅ぼされてしまったはずの巨人を見た、あるいは巨人の痕跡を見たという目撃譚は、アラビア語・ペルシア語の旅行記、地誌、百科全書などのテクストに、この世の驚異として記録されている。中世イスラーム世界において巨人の名残りについてどのような情報が流布していたのか、具体的な事例として、イブン・ファドラーンやガルナーティーの旅行記に含まれる巨人の目撃譚、さらにムハンマド・トゥースィーの『被造物の驚異と万物の珍奇』という百科全書に含まれる巨人にまつわる項目をとりあげる。

中世ヨーロッパにおいては、巨人を含む異形の民族は、古代ギリシア・ローマの古典からの情報と聖書の内容をつきあわせたかたちでそのイメージが形づくられ、遠い、漠然とした「東方」地域にいるものとされていたようである。中世イスラーム世界でも、ヘブライ語聖書世界に起源を持つ宗教説話やアレクサンドロス物語といった共通の情報源に基づいた「古代の巨人」の描写が見られるが、同時代のヨーロッパ人よりも実際に旅をして移動できる範囲が広く、周縁世界に住む生きた巨人もしくは巨人の遺物を特定の土地で「見

た」という情報も少なくなかった。

キーワード
巨人、遺物、イスラーム世界、驚異、人類史観

The Remains of Giants:
Narratives on Colossal Peoples in the Mediaeval Islamicate World

Yuriko Yamanaka
National Museum of Ethnology

Abstract

In the tales of wonders included in encyclopedias and chronicles of the mediaeval Islamicate world, the discovery of large bones and ruins of unknown origin was linked to legends of giants. We will introduce some examples of such tales and examine how the depiction of giants not only reflects the religious world view of the people of the time, but also their views on the history of humankind.

In this paper we will examine the agency of physical remains, such as giant bones and ruins of unknown origin, in the formation of legends about giants in the mediaeval Islamicate world. We will also question what kind of objects or places were linked to stories about giants. The texts studied here are eyewitness accounts and records related to peoples regarded as giants and relics attributed to giants contained in travelogues and encyclopedias written in Arabic and Persian.

In religious texts of the medieval Islamicate world, such as the holy *Quran* and the Tales of the prophets, giants appear as emblematic figures whose function is to convey the admonitory message that the consequence of defying God is extinction. Whereas, in travelogues and encyclopedias, they appear as a part of the "wonders of God's creation". We will analyse specific passages of eyewitness accounts about encounters with giant peoples, or discovery of physical remains of giants — such as large bones, jewelry, or ruins — included in the travelogues of Ibn Faḍlān and Gharnāṭī, as well as in the entries on the "People of ʿĀd" in Muhammad Ṭūsī's encyclopedia *ʿAjāʾib al-makhlūqāt* (Wonders of Creation).

In medieval Europe, the image of strange peoples, including giants, was mainly based on information from Greek and Roman sources and Biblical tales, and giants were thought exist in a rather distant and vague region in the “East”. In the medieval Islamicate world, some of the narratives on "ancient giants" are also based on common sources such as the Alexander Romance or religious tales originating in the Judaic tradition. However, Muslim traders and travelers had a much wider network of movement compared to their European contemporaries, bringing back reports of “living” giants or relics of giants living in the peripheral lands, thereby giving a more specific geographical and temporal existence to giants.

Keywords

Giants, Ancient Artifacts, Islamicate World, Wonders, Protohistory

1. はじめに

まずは、ウィーンのシュテファン大聖堂北門付近で1443年に出土したという化石の写真を見ていただきたい（図版1）。長さ86㎝の哺乳類の大腿骨で、ヒトの大人の大腿骨の平均的な長さの約二倍もある。

図版１　1443年にシュテファン大聖堂付近で発見された大腿骨の化石（ウィーン大学所蔵）[1]

片面（図版1下）には、1443という数字が彫られている。聖堂の北塔建立のために周囲の地盤が掘り起こされたのがその頃であり、骨が発見された年とされる。もう片面（図版1上）に刻まれている、AEIOUは、ドイツ語で、„Alles Erdreich ist Österreich untertan“「全世界はオーストリアに属す」、またはラテン語で“Austria erit in orbe ultima”「オーストリアは世界で最後まで残る」を意味する頭文字であるという。神聖ローマ皇帝であったフリードリヒ三世（1415～1493年）のモットーで、ハプスブルク家の威光を誇示する政治的なメッセージである。発掘当初から18世紀頃までは「巨人の骨」であると信じられ、大聖堂の入口のポータルに吊るされていたようである。この入口がRiesentor「巨人の扉」と呼ばれるのは、この骨が永年そこにかかっていたから、という説もある。巨人の骨をハプスブルグ家の権力の象徴として（しかも教会に）掲げるという行為に、神から与えられた超人的な力の表象としてその物質を利用しようとする呪術的な意図を見ることもできる。

ドイツの医師であり鉱物学者であったフランツ・エルンスト・ブリュックマンが18世紀前半にウィーンを訪れた際にはまだ吊るされていたようで、これを目撃したブリュックマンは啓蒙時代の博物学者らしく、「巨人の骨」という呼称が間違っていることを1729年に指摘している[2]。19世紀にはウィーン大学が所蔵するところとなり、約8000年前のマンモスの右大腿骨の化石であることが分かった。現在は、2016年よりウィーンの自然史博物館に永久貸借されている。

このように、発掘された古生物の骨や歯が、かつて存在していた巨人の遺物とみなされ、教会や市庁舎などの壁に象徴的に掛けられることはヨーロッパではしばしばあったらしい[3]。現存する動物のものとは考えられない巨大な骨や歯の生々しい実在感が人々の想像力を刺激し、巨人の伝承と結び付けられたという事例は、近代的な先史考古学が発展する以前のヨーロッパに限られたことではない。

本稿では、中世イスラーム世界において、巨大な骨や、いつ誰が造ったか分からない建造物の廃墟といった物質がどのようなエージェンシー（行為主体性）を持ち、どのような記録・言説・視覚表現として残っているのかを考察する。対象とするのは、アラビア語やペルシア語で書かれた旅行記・歴史書・博物誌といったテクストに含まれる巨人と見做された民族や、巨人のものとされた遺物にまつわる目撃譚である。

2. イスラームの宗教テクストにおける巨人族

こうした目撃譚の考察をする前に、まずは中世イスラーム世界の人々が持っていた巨人観を概観するために、その精神的基盤となっている聖典『クルアーン』や諸預言者伝集といった宗教テクストにおける巨人の表象に簡単に触れておこう。

そこに見られる巨人像には、「神に滅ぼされた民」、「遺跡を残した太古の民」、「退治されてしまう先住民」といった側面が見られる。イスラームに先行する一神教であるユダヤ教の伝承やヘブライ語聖書に含まれる逸話との家族的類似も見られるが、ユダヤ教テクストにおける巨人レファイムに見られると高井と勝又が本書で述べているような、天上から堕ちた者、地下冥界に住む死霊という側面は持たないという点は指摘しておこう。体が巨大で異形であるが、あくまでも人類の一民族であり、唯一の神を信じないけれども、必ずしも攻撃的なわけではない。以下、具体的なテクストを見てみよう。

2-1. 神に滅ぼされた巨人族アード

『クルアーン』には、神の教えを拒んで滅ぼされた「失われたアラブ」*ʿArab al-bāʾida* の民族の一つであるという「アード」という民族が登場し、その体は巨体であったとされている。例えば、「高壁章」の次の章句（7：65–72）には、アード族のうちでアッラーを信じたフードが仲間の民に唯一神に仕えるように説くが拒否され、そのために神がアード族を滅ぼした経緯が記されている。

> 7:65.（われは）またアードの民に、その同胞のフードを（遣わした）。かれは言った。「わたしの人びとよ、アッラーに仕えなさい。あなたがたには、かれ（アッラー）の外に神はないのである。あなたがたは主を畏れないのか。」

7:66. かれの民の中(うち)不信心な長老たちは言った。「わたしたちは，実際あなたを愚かな者だと思う。またあなたは，本当の嘘つきだと考える。」［中略］

7:69. あなたがたの中(うち)の 1 人を通じて警告するために、主の訓戒があなたがたにやって来たことを驚くのか。主はあなたがたにヌーフの民の後継ぎをさせ、またあなたがたの体が強大にされたことを思いなさい。だからアッラーの恩恵を念じなさい。きっとあなたがたは成功するであろう。」［中略］

7:72. それだからわれ［アッラー］は慈悲をもって、かれと一緒にいる者たちを救い、わが印(しるし)を拒否した者と信仰しなかった者たちを根絶してしまった[4]。

『クルアーン』ではこのように、ヌーフ、つまりノアの子孫であり、「体が強大にされた」民であるとされるが、どれほど大きかったかは記されていない。アード族の身長や容姿についてのより具体的な伝承は、イスラーム初期の宗教説話を集めた預言者伝集や『クルアーン』注釈書のジャンルに含まれている。そのうちの一つ、サアラビー Thaʿlabīʿ（1035 没）による『諸預言者伝集』*ʿArāʾis al-majālis fī qiṣaṣ al-anbiyā* には、アード族の姿を想像させる次のようないくつかの伝承が引かれている。

（アード族について）アブー・ハムザ・アル＝ヤマニーは言った。「いずれもが 70 ズィラーアほどの背の高さだった。」イブン・アッバースによると「80 ズィラーア」で、アル＝カルビーは「最も背の高い者で 100 ズィラーア、最も背の低い者でも 60 ズィラーアはあった。」と言った。

ワフブ[5] によると「各自、丸屋根のように大きな頭をしており、その目も鼻も野獣を生み出すかのようだった。神の代わりに偶像を崇拝した[6]。

ズィラーアはキュビット（腕尺）にあたる単位で、地域によって様々な尺度があったので正確に置き換えることは難しいが、仮に 1 ズィラーアを約 54 センチとすると、60 ～ 100 ズィラーアは約 32 ～ 54 メートルということになる。10 ～ 18 階建てのビル、もしくは初代ゴジラ（50 メートル）ほどの高さの巨人が想像されていたといえば、イメージがわくであろうか。

2-2. アード族の遺構

『クルアーン』におけるアード族への言及は他にも数か所あるが、「撒き散らすもの章」の一節――「またアードにも（印があった）。われ［アッラー］が惨害をもたらす風をか

れらに送った時を思い起せ。それはかれらを襲って、凡てを壊滅し廃墟のようにして、何も残さなかった。」（51:41–42）――では、神が暴風を巻き起こしてこの不信心の巨人族を滅ぼしたことが言及されている。逆にここからは、アードが野人のような存在ではなく、「廃墟のように」残るような建造物を建てる文明を持った民族として捉えられていたことがわかる。

そして、「暁章」の次の一節（89:6–8）では、彼らが建てた都は「円柱の並び立つイラム」と呼ばれている。

> あなたはアッラーが、如何にアード（の民）を処分されたかを考えないのか、円柱の並び立つイラム（の都）のことを、これに類（るい）するものは、その国において造られたことはなかったではないか。」[7]

イスラーム初期の時代には『クルアーン』に登場する「円柱のイラム」*Iram dhāt al-ʿimād* の解釈を巡ってはいくつかの説があったようだが、アッバース朝時代にはアード族のいにしえの都とする伝承が主流となり、中世イスラーム世界の様々な文献に伝わる[8]。先述のサアラビーの『諸預言者伝集』の「アードの生き残り、シャディードとシャッダード、円柱のイラムについて」の章に、詳しい描写があるので以下に一部引用する。ウマイヤ朝初代カリフのムアーウィアの時代（在位 661 ～ 680 年）に、イラムの遺跡が発見された、という内容の話である。

> ［伝承経路省略］アブダッラー・イブン・キラーバという男が失われたラクダを探しに行った。アデンの荒野に来ると城壁に守られた都が現れた。［中略］門を開けるとそこは見たこともないような都であった。トパーズやサファイヤの柱に支えられた空中楼閣は、それぞれ金、銀、真珠、サファイヤ、クリソライトで建てられていた。その楼閣の門は城門と同じように沈香でできていて、サファイヤが埋め込まれていた。楼閣の床は真珠や麝香の粒やサフロンで覆われていた。彼は真珠や麝香やサフランを集めたが、クリソライトとサファイヤは扉や壁に埋め込まれていて取れなかった。［中略…イエメンに戻り］人々にそれを見せ、出来事を語った。
>
> 話はムアーウィヤの耳に届き、カリフは男を呼び寄せた。［中略］ムアーウィヤはその話に驚き、「お前の言っていることを私は信じない」と言った。［中略］男は持ち帰った真珠や麝香の粒を目の前に広げてみせた。カリフは麝香を匂ったが香りがせず、一粒つぶすよう命じると、麝香とサフランの香りが満ちてきて、ようやく男の話が本当であるとわかった。

ムアーウィヤは「この都の名前が何で、誰に属し、誰が建てたかを知るにはどうしたらよいのか。ダビデの息子ソロモンですらこれほどの都を持っていなかった。従者の一人が言った。「確かにソロモンはこのような都を持っていませんでした。この都に知識を持っている者が今の時代にいるとしたらカアブ・アル＝アフバールしかおりません。」

（カアブは言った）「この都は男が言うように実在します。それを建てたのはアードの息子シャッダードで、その都は円柱の都イラムです。それに匹敵する建造物は何処を探してもないでしょう。」［中略］「アードには息子が二人いました。シャディードとシャッダードです。アードが死ぬと二人が残り、権力を手に入れた彼らはこの世の東の果てから西の果てまで服従しないものがいなくなるまで、あらゆる土地を支配し、全ての民を降伏させました。その力を絶対的なものにした後にシャディードが世を去り、シャッダードが一人で支配するようになりました。逆らうものは誰もおらず、全世界が彼のものでした。」

「彼は古の書物をよく読み、楽園について読むたびに、この世に同じものを造りたいという衝動にかられました。それは神を乗り越えようとする冒涜的行為でした。」［中略］「（シャッダードは命じた。）『この世で最も美しく、広大な土地を見つけて、そこに金、銀、クリソライト、サファイヤ、真珠でできた都を建てよ。都の基部はクリソライトやサファイヤの柱で造り、その上にいくつもの楼閣がそびえるようにせよ。楼閣の下にはあらゆる果物がなる樹を植え、根本には川が流れるようにせよ。私は楽園について書物で読み、地上に同じものを造り、そこに一刻も早く住まいたいのだ。』」［後略］[9]

そして、カアブがカリフに語ったところによると、地上の楽園のような都の建設が終わり、シャッダード一行がその近郊に着いたまさにその時に一族もろとも神に滅ぼされ、結局一度も都に入らなかったという。発見された廃墟の由来を語るこのカアブ・アル＝アフバール（652–6 年頃没）とは、「イスラーイーリーヤート（イスラエルもの）」と呼ばれるイスラーム的コンテクストに置き換えられたユダヤ・キリスト教説話を多く伝えたイエメン出身の伝承者である。カアブは古代の文明に関する知識の権威としてこの逸話に登場するが、この宝物発見譚自体の信憑性が疑わしいことは、すでに 10 世紀の歴史家マスウーディー（896 頃〜 956 年頃）が『黄金の牧場と宝石の鉱山』で指摘している[10]。著名な伝承者の名を借りて、アラビア半島南出身のイエメン系の人々が、自らの出身地の文明度の優位性を主張するために語った話である、という説もある[11]。

2-3. モーセに退治されるウージュ

『クルアーン』に登場する巨人といえばアード族以外に、ムーサー（モーセ）に退治される「巨大な民」が挙げられる（食卓章 5:20–26）。

> 5:21. わたし［ムーサー］の人びとよ、アッラーがあなたがたのために定められた、聖地に入れ。あなたがたは、踵を返して退いてはならない。そうしたらあなたがたは失敗者になる。」
>
> 5:22. かれらは言った。「ムーサーよ本当にそこには、巨大な民［*qawm jabbār*］がいる。かれらが出て行かなければ、わたしたちは決してそこに入ることは出来ない。もしかれらがそこから去ったならば、わたしたちはきっと入るであろう。」
>
> ［中略］
>
> 5:24. だがかれらは言った。「ムーサーよ、本当にわたしたちはかれらがそこに留まる限り、決してそこに入れない。あなたとあなたの主が、2 人で行って戦え。わたしたちはここに座っている。」
>
> 5:25. かれ［ムーサー］は申し上げた。「主よ、本当にわたしはわたし自身と兄弟の外（ほか）は制御出来ません。ですからわたしたちを、この反逆の民から引き離して下さい。」
>
> 5:26.（主は）仰せられた。「ならばこの国土を、40 年の間かれらに禁じよう。かれらは地上をさ迷うであろう。だからあなた方は主の掟に背く民のことで悲しんではならない。」[12]

この章句の源泉にあるのは、ヘブライ語聖書の『民数記』（21 章）や『申命記』（3 章）に登場するレファイム（巨人）の王オグの話であるが、『クルアーン』では具体的な固有名詞とは結びついていない。ここに登場するのは、脱エジプトを果たしたムーサーとイスラエルの民が聖地（パレスチナの北方のカナアンの地とされる）に入った際に出くわす巨大な先住民である。偵察に行ったイスラエルの人々は、この巨大な民に恐れをなして聖地に入ることを拒んだため、「反逆の民」として 40 年間聖地に入ることを許されずにさ迷い続ける罰を神に与えられる。『申命記』（3: 1–11）では戦いの末にモーセがその地を占領したという記述があるが、『クルアーン』に書き留められた啓示にはその部分は含まれない。

ムーサーによる巨人退治の説話がより詳しく記されているのは、やはり前述のサアラビーの『諸預言者伝集』である。ここでは聖書のオグが、アダムの娘アナクの息子、ウージュとして登場する。少し長いので間を省略しながら引用する。

> イブン・ウマル[13]は言った。「ウージュの背丈は23,000ズィラーアであった。［中略］ウージュは雲を掴み、そこから水を飲んだ。海底から魚をすくい、日光で焼いて食べた。」
>
> このように伝えられている。大洪水が起こった際にウージュはヌーフ（ノア）のところにきて「あなたの箱舟に乗せてください」と言ったが、ヌーフは「去れ、神の敵よ。お前については神の命が何もなかった。」と言った。地上は野も山も水浸しになったが、その深さはウージュの膝にもおよばなかった。彼はムーサーに退治されるまで3000年生き続けた。
>
> ムーサーは1パラサング（約5キロ）四方ほどに広がる軍隊を連れていた。ウージュはそれを見て、山に行き、ムーサーの軍隊と同じ大きさの岩を切りだし、その上に落そうとした。しかし神はヤツガシラを他の鳥とともに送り、鳥たちは岩をくちばしでつつき始めた。そのうちついに岩に穴が開き、アナクの息子ウージュの首の周りに落ち、彼は倒れた。ムーサーの背丈は10ズィラーアで、手にした杖も10ズィラーアで、さらに10ズィラーア飛び上がったが、それでも倒れたウージュの踵にしか届かなかったが、ウージュを殺した。人々は刀を持って近づき、苦労をして頭を切り落とした。殺された際にウージュはナイル河に落ち、一年間河を覆った[14]。

前述のアード族が100ズィラーア（約50メートルほど）の高さまであるとされていたのに対して、1ズィラーアを約54センチとする同じ計算で換算すると、このウージュは約12,420メートルもあったことになる。まさに地上に立てば積乱雲の上層雲を突き出て、マリアナ海溝（10,911メートル）の底に立っても頭は海面より出るであろうほどの高さになろうという、かなり誇張された描写になっている。ノアの大洪水も生き延びて、超人的な長寿であったのが、神に送られたヤツガシラと鳥たちの攻撃によって倒され[15]、ムーサーによってとどめを打たれてしまう。この場面は、預言者伝集の写本挿絵でよく描かれる。（詳しくは、本書の林の論考を参照。）

3. 巨人目撃譚

このように、啓典『クルアーン』や預言者伝集といった宗教テクストにおいて巨人は、

神によって、あるいは神の使いによって根絶されてしまった民族という教訓的な存在として現れる。

しかしこの太古の昔に滅ぼされてしまったはずの巨人を見た、あるいは巨人の痕跡を見たという目撃譚は、アラビア語・ペルシア語の旅行記、地誌、百科全書などのテクストに、この世の驚異として記録されている。以下、中世イスラーム世界において巨人の名残りについてどのような情報が流布していたのか、代表的な事例をいくつか拾ってみよう。

3-1. 旅行記・地誌

まずは、イブン・ファドラーン『ヴォルガ・ブルガール旅行記』をとりあげよう。本書は、アッバース朝カリフ、ムクタディル（在位 908 ～ 932 年）の命により、イスラーム化した新興王国であるヴォルガ・ブルガール王国に 921 ～ 922 年に派遣された使節団の体験を、同行した書記官のイブン・ファドラーンが記録したものである。

当時のイスラーム世界にとって辺境であった北方ユーラシアにおいてカリフの一行が出会った物珍しい民族、風習、動植物についての驚異譚が多く含まれており[16]、そのうちの一つに、王自身から聞き取ったこととして、イティル川（ヴォルガ川）で発見された 12 ズィラーウもあるという大男の話がある。家島訳から引用する[17]。

> 以前のことであるが、［従者の］タキーンは、王の土地には非常に大きな体格の男がいる、と私に語ったことがあった。そこで、私はその地に到着すると、早速、そのことを王に問い資したところ、王は「そのとおりだ。その者はかつてわれわれのところにいたが、死んだ。しかし、その者はこの土地の民でなく、また人間でもないのだ」と答えた。そして王の報告によれば、つぎのとおりである。
>
> 「商人の仲間たちは、いつも出かけるのと同じように、イティル川に向かった。［中略］ある日のこと、突如として、その商人たちの一団がわしのもとに現れて、“おお、王様よ！　人が水に浮かんでいます。［中略］”と語った。そこで、わしは、彼らと一緒に馬に乗って出かけると、その川に着き、果せるかな、わしはその男と出会ったのだ。その時、男はわしの身の丈から算定すると、一二ズィラーゥもあり、しかも特大の深鍋のような頭、手の平よりも大きな鼻、巨大な二つの眼玉、一つひとつの手の平よりも大きな指を持っていた。わしは、その者に近づいて話してみたが、その者はわれわれに［何も］喋らず、われわれをじっと見ていた。
>
> そこで、その男をわしのところに連れて来ると同時に、われわれのところから三ヵ月旅程のところに住むウィースー人のもとに手紙を送って、その男について訊いた。すると、彼らはわしに返事を送って来て、つぎのことを知らせた。“この男は、われ

われ［ウィースー］のところからさらに三ヵ月の距離を隔てたヤージュージュとマージュージュの者である。彼らは裸であり、われわれと彼らとの間には海が介在している。なぜならば、彼らはその海の岸辺に住み、まるで獣、畜生のごとく互いに雑婚する。輝かしき誉れと犯しがたき威厳のアッラーは、毎日、彼らのために海からの魚を授けられている。彼らの各自は出刃包丁を持って現れると、自分とその家族を満たすに十分な量［だけの魚］をその包丁で刻む。もしも必要以上に捕ると、本人は腹を壊し、同じようにその家族までが腹を壊してしまい、時には本人が死に、さらに家族全員が死ぬこともある。したがって、{彼らの必要な量だけの} 魚を捕ると、魚の方が方向を転じて、海に下って行く。そのようにして、彼らは日々を過ごしている。われわれと彼らの両地の間に、一方の側には海が、他方の［残りの］側には彼らの周りを取り巻く山々があり、さらに彼ら［が住むところ］と彼らがいつも出［入りしてい］る門との間にも、墻壁（スッド）がある。輝かしき誉れと犯し難き威厳のアッラーは、彼らを［一般の人たちの住む］居住世界に解き放たせようとお望みになられて、その墻壁を開く機会をお与えになられた。かくして、海［水］は減り、魚は彼らから離れた（魚が来なくなった）。［後略］”」

さらに王がイブン・ファドラーンに語ったところによると、子供がこの巨人を見るとショック死してしまい、妊婦は流産してしまう。しかも人を掴むとあまりに力が強すぎて絞め殺してしまうので、高い木に吊るして拘束したところ、死んでしまったという。そして大男が吊るされていたという森に案内されたイブン・ファドラーンは、実際にその遺骸を目撃する。

王は私を連れて馬に乗り、巨大な樹木の茂る大きな森に向かった。そして、彼は私を一つの樹木のものに案内すると、{その男の骸骨} と男の顔がその樹木の根本に {落ちていた}。よく見ると、その頭は、まるで蜜蜂の大巣箱ほどもあり、さらにその肋骨はナツメ椰子の実の［袋状に垂れた］房の付け根よりも大きく、その一対の足骨と一対の腕骨についても同じくらいで、私はそのことに驚愕して、戻って来た。

この6メートル以上はあるという大男はウィースー人（ヴェプス人）の情報によると、ヴォルガ・ブルガール王国からさらに遠いところに住む野蛮な民ヤージュージュとマージュージュであると報告されている。ヤージュージュとマージュージュは聖書のゴグとマゴグのことであり、イスラーム世界の伝承では、アレクサンドロスが建設した障壁によって封じ込められるが、終末の時にそれを破って世界を滅ぼすと信じられていた[18]。この伝承を利用し、文明世界を脅かす恐ろしい蛮人の存在をにおわせ、その物的証拠である巨大な骨まで見せて震え上がらせるというのは、実は、カリフの使節団に対する王の巧みな心

理作戦だったのではないか、という興味深い説を唱えているのはジェームス・モントゴメリーである[19]。外からの権力の干渉や資源の搾取を退ける政治的・経済的な意図を背景に、「この先は恐ろしい土地である」というイメージを植え付けるために通訳や水先案内人などの現地インフォーマントが語ったことが驚異譚として流布したのではないかということは、食人種や女護が島の伝承についても言われていることである[20]。イブン・ファドラーンが見せられた骸骨は、冒頭のマンモスの骨のような、巨大な古生物の化石であった可能性も考えられなくもない。

北方の地で巨人の骨を見たというアラブの旅人はイブン・ファドラーンだけではない。二世紀半近く後に、ムワッヒド朝（北アフリカとイベリア半島南部を支配したイスラーム王朝）下のグラナダからヴォルガ川流域まで旅した学者、ガルナーティー（1080 ～ 1169 年）の旅行記『理性の贈り物と驚異の精選』（1162 年）には[21]、「この国［ブルガール］ではアードの民の骨が見つかる。一本の歯の幅は手のひら二つ分で、長さは四つ分である。頭から肩までは腕四本分もある。頭は巨大なドームのようだ。ここではこうしたものがよく見つかる。」と書かれている[22]。Anqūrīya すなわちハンガリーについて書かれた箇所では実際に発掘に立ち会ったかと思われるような目撃譚もみられる。

> かの土地で、アードの民の墓を多く見た。前歯の根の半分まで掘り起こしてくれたが、手のひらほどの幅で 1200 ミスカール［約 5 キロ］ほどの重さがあった。別の墓からは手首の骨の突起を出してくれたが、片手では持ち上げられなかった[23]。

掘り起こされたという状況から、やはり、なんらかの巨大な古生物の化石が巨人の遺骨とみなされていた可能性が高く、彼が探求した知識の幅の広さがよくわかる。

ガルナーティーの旅行記にはさらには、骨でなくアードの生き残りに実際に出会ったという記述もある。

> ブルガールの地において、530 年（西暦 1136 年）に、7 ズィラーア以上もあるアードの民族の人を見た。彼の名はダンカーといった。非常な力持ちで、ヤギをかかえるように馬を腕に抱えて持ち運ぶことができた。また馬の脚を神経もろとも、まるで草の束のように手でちぎることができるほどであった。ブルガールの王は彼のために胴よろいを作らせたが、それは荷車で戦場に運ばれた。また、鉄の兜は巨大な鍋のようであった。オークの幹を、まるで杖のように右手で振り回して戦った。象を一振りで殺すこともできたであろう。それにも関わらず、彼自身はいたって謙虚な人であった。彼に会うと―私の頭は彼のベルトまでも達しないくらいであったが―挨拶をして、私を迎え、賛辞の言葉を降り注いでくれた。神の慈愛あれ。

町中で彼が入ることができる風呂屋はほとんどなく、十分に戸口が大きい一軒しかなかった。

人生で出会った人の中でも、彼は飛びぬけた存在である。彼には同じくらい大きい妹がおり、ブルガールで何度か見かけた。町のカーディーであるヤアクーブ・イブン・ヌウマーンによると、この大女は、国中で一番強いとされたアダムという名の夫を、胸に抱いただけで、一瞬にして殺してしまったという[24]。

7ズィラーアは低めに換算しても3メートルを超えるが、前述の伝承にあった100ズィラーア、23,000ズィラーアというような巨人の大きさに比べると、若干誇張はあるかもしれないが、より現実味がある数字である。妹も大きかったというので、遺伝的に体の大きな一族だったのかと思わせる。この巨人は、遥か昔に存在した、あるいは漠然と遠い地にいる異形の民族というような存在ではなく、ダンカーという名前のついた特定の個人である。戦場ではめっぽう強いが、いたって謙虚で、出会えば挨拶をしてくれる気のいい奴だったという好意的な描写には、北方の地に一時的にでも住み着いて人びとの社会に入り込む機会をもったガルナーティー自身の心の広さもにじみ出ているようだ。

3-2. 百科全書

このように、イブン・ファドラーンやガルナーティーの旅行記に含まれる巨人の話は、「実際に見てきた」という第一次目撃者の証言である。最後にとりあげるムハンマド・トゥースィーの『被造物の驚異と万物の珍奇』は、天体から地上の動植物に至るまでの様々な既存の情報を総合し、項目ごとの章立てに整理しなおした百科全書である[25]。ペルシア語で編纂され、セルジューク朝最後の君主トゥグリル3世（在位1176～94年）に献呈されたものである。すでに上にみたような宗教説話や旅行記における巨人の話も引用されており、12世紀末までにアラビア語やペルシア語で書かれた巨人族に関する知識の集大成とみてよいであろう。

本書は序文と10の章からなり、特に下線を引いた第4部、第6部、第7部に、巨人にまつわる情報が含まれている。

序文
第1部：天体の驚異について
第2部：火と空気（風）の驚異について
第3部：水（海・湖・河川）と大地（山・鉱物・石）の驚異について
<u>第4部：諸都市の驚異について</u>
第5部：樹木の驚異について

第 6 部：遺構や遺物（彫像・壁画・墓・財宝）の驚異について
第 7 部：人間の驚異について
第 8 部：ジンやシャイターン（悪鬼・妖霊）の驚異について
第 9 部：鳥の驚異について
第 10 部：動物の驚異について

紙面の都合上、全ての関連個所を詳細にはとりあげられないが、各部にどのような巨人にまつわる情報が含まれているのか、簡単に触れておこう。

第 4 部「諸都市の驚異」は、著名なモスクやユダヤ教・キリスト教の聖地、様々な地方の特徴やそこにまつわる逸話を紹介した章である。そこには、アード族によって建設され過去に滅びてしまった都が二つ登場する。一つは、『クルアーン』に「円柱の並び立つイラム」として言及されている壮大なエラムの宮殿のことである。アードの息子シャッダードによるこの都の建設と神によるその破壊については、前述のサアラビーの『諸預言者伝集』に含まれる伝承をすでに上に引用したが、トゥースィーも類似した逸話を引いている。さらに加えて、宮殿を飾る宝石を得るために耳ごと耳飾りを切り取られた娘の懇願を神が聞き届け、その娘の叫び声によってシャッダードは肝が裂けて死んだという、また別系統の伝承も記されている[26]。

二つ目は双角の主、すなわちイスカンダル（アレクサンドロス）がイエメンの境域の「暗黒の地方（al-Diyār al-muẓlima）」で発見する真っ黒な町である。イスカンダルは闇の中で宮廷人も住人もすべて石となった状態で発見し、碑文によってその町がジャワーブ・ブン・ワーディゥ・ブン・シャディード・ブン・アードによって建設されたもので、アード族の後継者サムード一門の末裔がそこを統治していたが、神に滅ぼされてしまったことを知る[27]。エラムの都は、オマーンにある実際の遺跡と同定されることもあり、岡本が本書でとりあげている、「ストーンヘンジの巨石は巨人族がもたらしたもの」という、遺跡の起源に巨人の存在を匂わせるブリテン島の伝説と通じるところがある。

「遺物や遺構」に関する第 6 部には、巨大な墓についての記述がいくつか含まれる。その内、巨大な原初の人アダムの墓は上半身は陸地にあり、足の部分は海の中にあるとされ、遠いサランディーブの土地の不思議で珍しい遺構として描写されている[28]。

> アーダム――彼に平安あれ――の墓はサランディーブにある。半分は陸地に、半分は海の中にある。枕部分［にあたる頭］は陸にあり、20 アラシュの長さがある。足は水中にあり、40 アラシュである。陸にある部分は高くて峻険であるため、誰もそこにたどり着けない。水中にある部分は、魚がそのまわりを周回しており、墓から遠ざかることも近づくこともできない。もし魚や動物が彼の墓に行き当たると石化する。石になり、海底へと沈むのである。アーダム――彼に平安あれ――は顔を東に向

け、手を口にあて、もう一方の手をへその下に置いている。これは、「言葉に気をつけよ、女陰に気をつけよ」ということを示している。

［中略］サランディーブの海は、水が黒い。アーダムの墓は半分が水中に、半分が陸地にある。彼の墓の上には巨木が生えている。その実はナツメのようである。またその葉からは、夜も昼も絶え間なく、彼の墓の上に10万滴の真水が雨のように滴る。誰もこの墓の上に行くことはできないが、この水はいくつかの貯水槽に溜まり、サランディーブの人々はそこから水を飲む。墓のまわりにはたくさんの箱が置かれ、囲いが設けられている。ムスリムや不信心者やユダヤ教徒やキリスト教徒の修行者たちが暮らしているが、ヒンドの人々はそこに近づかない。その墓を参詣するヒンドの人は裸になり、修行庵の中に暮らす。そのような者には、現世の愉楽が死ぬまで禁じられる。この墓はクルズム（紅海）のほとりにある。一端はカーフの山に、一端は「闇の世界」に、一端は水に［接している］。

また中国にある巨大な墓に、「足で立ち、両手が体幹から垂れ下がっている［落ちている？］。体にはたくさんの毛が生えている。手で男の腹を叩くと、太鼓の音がする。それが誰なのか誰も知らない。」というヤシの木のような男も[29]、異郷の驚異に対する好奇心を呼び起こすようなものである。

一方、巨大な遺骨あるいは歯や指輪が発見され、それらの巨人の遺物が『クルアーン』のアードの民と結び付けられ、時の施政者によって教訓として解釈される、というパターンの逸話も多い。例えば、下記の三つの引用などはそうである。

〈巨大な墓〉

東方の王が自分の国で墓を発見した。中に［巨大な］1つの遺体があった。［王は］その者の2本の歯を2頭のラクダに乗せてカリフのもとへ送った。カリフは手紙を書いた。いわく、「おお不信心者よ。被造物をかように創造し、滅ぼされる神の力を畏れよ[30]。」

〈［イエメンにある］墓〉

イエメンで墓が見つかった。中には1人の人物が眠り、指には、人間の頭にすっぽりとはまるくらい大きな指輪［がはめられていた］。その指輪はウマル・［ブン・］アル＝ハッターブのもとへ送られた。［ウマルは］これを目にすると涙を流した。「どうして泣くのですか」と［人々が］尋ねると、［ウマルは］言った。「我が身を嘆

いているのだ。指が我々の〔首〕よりも大きな種族がいたというのに、死が彼らを制してしまった。彼らがこの世から何を得ることができたのか、私にはわからない[31]。」

教友たちはみなウマルと一緒に泣いた。

〈巨大な墓〉

ムアーウィヤの治世に1人の人物が見つかった。岩の上に横たわり、背丈は28アラシュであった。カァブ・アル＝アフバールに「これは誰か？」と［人々が］尋ねると、彼は言った。「彼の名はわかりません。ですが、彼の見当について述べましょう。創造主――至大なれ、崇高なれ――は『朽ちたナツメヤシの木のように』［Q69:7］とおっしゃっています。つまりアードの民はみな、ヤシの木のように倒れてしまったのです。」

ムアーウィヤは命じて、人々がそれから訓戒を得られるよう墓を造った[32]。

第7部「人間の驚異」は、人間の知性・霊魂・五感・諸器官・性別などに関する項目に加えて、「我々とはかけ離れた奇妙な［人々の］名称やその土地の特性」を記すという民族学的関心から集められた「様々な階層の人間とそれぞれの気質や姿について」という章が含まれ、そこに〈巨大で強大なアードの民について〉の情報がまとめられている[33]。そこには、巨大な骨や歯、指輪の発見という記述や、ムーサーによるウージュ退治といった上に触れた宗教説話に基づく記述が見られる一方で、生きた巨人との遭遇に関する証言も含まれている。

その内の一つがイスカンダル（アレクサンドロス）が出会ったというアード族の生き残りの女たちである。

イスカンダルは「永遠の島々」のうちの2つの島を見つけた。一方は男ばかりであり、もう一方は女ばかりであった。彼らが言うには、［男たちと女たちは］毎年互いの島に行き、女は妊娠する。子供が生まれ、それが娘であれば［女島に］留め、息子であれば男島に送るのだ、と。

［それを聞いた］イスカンダルは憤慨し、彼らを両島から連れ出し、彼らにイスラームを教え広めようと決意した。彼らは従おうとしなかった。［イスカンダルは］大いに努めたが、彼の軍はその女たちから逃げ出してしまった。一方、男たちは帰順した。

イスカンダルは困り果て、アリストテレスに次のような手紙を書いた。「私は、一方には男ばかりが、もう一方には女ばかりがいる2つの島を見つけたのだが、女たちは手に負えずどうすることもできない。わが軍は彼女らに打ち負かされてしまった。この件についてあなたは何とおっしゃるか。」

その返事にはこう書かれていた。「その女たちとは戦うな。あなたが彼女たちを打ち破ったところで名誉とはならず、もし彼女たちがあなたを打ち破ったならば不名誉となるばかりだ。この女たちとは和睦し、帰還されるのが得策である。」
その手紙がイスカンダルのもとに届くと、女島に使者が送られた。［使者は］伝えた。「私はそなたたちの前から立ち去ろう。だが、そなたらのうち40人の女が私に仕え、私の敵と相まみえるという条件のもとにだ。」

女たちはこの条件を受け入れて投降した。彼女たちは、股の間を馬が通り抜け、どれほどの天幕にも入ることができないほどに大きかった。彼女らが参加する戦いではいつも、馬や駄馬が彼女たちを恐れて逃げ出した。敵がある女の手に落ちると、その頭が引き抜かれるか、両足が引きちぎられるかしかなかった。あらゆる軍隊が彼女らから逃げていった。イスカンダルの武威は世界中に広まり、ついには世界を征服した[34]。

女戦士アマゾンの軍団とアレクサンドロスの出会いは、ディオドロスなどのギリシアの歴史家の史書にもすでに登場するモチーフである。トゥースィーが挙げるこの逸話は、このギリシア起源のアマゾン伝説と、女ばかりの島に難破するという「女護ヶ島」型船乗り譚と、アード族の伝承とが組み合わさったような奇妙なエピソードである[35]。上に触れた暗黒の地方で石化してしまったアード族の末裔をイスカンダルが発見する話にもあったように、トゥースィーのこの百科全書においてアレクサンドロスは、「驚異の媒介者」として頻繁に登場する。非凡な行動力をもったアレクサンドロスが世界の果てで「見た」ということが、その驚異の存在の信憑性を高める効果を持っていた。トゥースィーが引用するアレクサンドロスに関するエピソードの多くは、「アレクサンドロス物語」の系譜に連なる原典から引かれており、現代の歴史学的観点からすると全くの虚構なのであるが、当時の人びとにとっては、アレクサンドロスは究極の探求者、旅人であり権威ある情報源とみなされていた[36]。トゥースィーは、アレクサンドロスがバービル（バビロン）で出会ったという別のアード族の生き残りの部族についても記している。

双角の所有者は「あなたは世界中を巡り、『闇の世界』にも立ち寄ったが、どのよ

うな驚異を目にしたのか」と尋ねられ、次のように答えた。「バービルには、山頂が雲に隠れて見えない山があり、その麓には深い海があった。私が海の中ほどまで行ったとき、非常に尊大で、巨体で、水面から出るほど巨大な男を見た。男の体はすべて毛で覆われており、平たい 2 つの耳があった。」

イスカンダルは［さらに］語った。「私は彼に恐怖を覚え、至高なるアッラーの御名を唱えて、『水の中でおまえは何をしているのか。おまえは悪魔か、それとも妖精か』と尋ねた。すると彼は言った。『私はアーダムの子孫だ。この先には、アフラースィヤーブが魚の骨で造った町がある[37]。我々の食べ物は魚の肉だ。アフラースィヤーブが集めたあらゆる富や財宝がその町にはある。我々はこの地で生まれ世代を重ねてきた。太陽の熱を避けて水の中にいるのだ。だからおまえが見ているような姿をしているのだ。』」

［中略］彼は立ち去り、40 人の男を連れて戻ってきた。彼らはみな魚が盛られた黄金の酒杯を手にしており、それらをイスカンダルの前に並べ、帰っていった。イスカンダルが学識者たちに彼らについて尋ねると、識者たちはこう言った。「これはアーダムの子孫に属する民です。彼らはこの岸辺に落ち着いたのですが、淀んだ空気によって腐敗した水のために、かたちが変化して恐ろしい姿になってしまったのです。彼らの体は獣と化し、とうとう彼らは獣の域に達して、人間の地位から転落してしまいました。それに、祖先がこのような土地に住み着いたので、魚で満足するようになったのでしょう[38]。」

住み着いた環境によって体が変化し異形になったが、悪魔でも妖精でもない「アーダムの子孫」、つまり同じ人間であるというこの男たちは、水の中に住み魚だけを食べるという。「アレクサンドロス物語」の何らかのヴァリアントが情報源になっているようであるが、管見の限り、中世イスラーム世界の歴史書、教訓書、宗教書、物語文学に類似の話を見出すことができず、かなり特異な変異種といったところである。

トゥースィーには、情報源が明確な、より時代が新しい巨人遭遇譚もある。先に挙げたイブン・ファドラーンから引用された〈イティルのアードの男〉の話である。

ルースの川の向こう側には背が高く巨大な民がいる。彼らは獣のような気質をしており、ゴグとマゴグに属する種族である。アフマド・ブン・ファドラーンはタキーンから次のように聞いたと言っている。

「ブルガールの王が私に語ったところによると、川が氾濫したときにブルガールの

一部族がイティルにやってきた。ある日その地方で非常に大きなわめき声や叫び声が上がった。『水面に人が現れたぞ。もし彼らが［別の］集団の一員で、私たちの近くに住んでいれば、この地に私たちの居場所はなかろう。』

私たちはイティルの川まで出かけ、［そこで］1 人の男を見た。男の背丈は 12 アラシュもあり、頭は巨大で、鼻は手のひら 2 つ分もあった。私は恐ろしくなった。男に話しかけてみたが、返事はなかった。私たちは、3 ヶ月の行程にあるイースー（Īsū）の町に手紙を書いた。『このような特徴の男がここに現れた。彼がどこからやって来たのか私たちに知らせてほしい』と。次のような返事が届いた。『男は川に流されてきたのだ。その者たちは獣と同じく裸の民である。創造主は彼らの日々の糧を魚とされた。我々の中では、その地方に行こうとする者は誰ひとりとしていない。』」

その後、タキーンはその男を捕らえた。というのも、男は手にしたものを何でも食べ、ばらばらに壊すからであった。男は子供たちを食べてしまうこともあった。男は鎖で古い木に縛りつけられた。

［ブルガールの王は］「もしあなたがお望みなら、［その男を］あなたに見せましょう」と〔言い〕、彼は案内された。

私はついに、木の根元に男が倒れているのを見た。［男の］脛は巨大なナツメヤシの幹ほどもあった。肉は鳥たちがついばみ、彼の残骸がそこに転がっていた。人々は言った。「この者はゴグの子孫である。川が彼を攫い、こちら側に運んできたのである」と[39]。

12 アラシュ（ズィラーアに同じ）もある大男がイティル川に出没し、捕えられて木に縛られたという話をイブン・ファドラーンがブルガール王に聞いて、王にその遺骸まで案内されるという基本的な筋は同じである。しかし、死骸の肉を鳥たちがついばんでいたという生々しい脚色も見られ、若干イブン・ファドラーンの旅行記の記述とずれる部分もある。

以上のように、トゥースィーの百科全書における巨人に関する記述は、同時代の目撃情報ではなく、いずれも過去の文献からの引用というかたちである。情報源としては、1）諸預言者伝集などにおけるウージュ、アード、イラムの都にまつわる宗教説話、2）アレクサンドロス物語に起源を持つ驚異譚、3）原典が確定できない骨や遺物の発見譚、4）旅行記、年代記など時代や場所が特定できる報告、といった系統が挙げられる。そして当時の知の集大成であったトゥースィーの百科全書からは、不信心のために神によって滅ぼ

された太古の民族、野蛮で暴力的な周縁の民、環境に適応して変異した民族という中世イスラーム世界の巨人像が浮かびあがってくる。

4. むすび

比較という点からすると、中世ヨーロッパにおいては、巨人を含む異形の民族は、古代ギリシア・ローマの古典からの情報と聖書の内容をつきあわせたかたちでそのイメージが形づくられ、遠い、漠然とした「東方」地域にいるものとされていた。中世イスラーム世界でも、ヘブライ語聖書世界に起源を持つ宗教説話やアレクサンドロス物語といった共通の情報源に基づいた「古代の巨人」の描写が見られる。しかし、同時代のヨーロッパ人よりも旅人が移動できる範囲が広く、周縁世界に住む生きた巨人もしくは巨人の遺物を特定の土地で「見た」という情報も少なくなかった。それはむしろ、大沼氏が本書でとりあげた中世ヨーロッパの百科事典に登場する巨人よりも、黒川氏が例として挙げている、大航海時代の南アメリカ大陸南端でヨーロッパの探検隊が体の大きな民族に出会ったことに端を発するパタゴニア巨人説に近いものがあるといえよう。

最後に、現代のイスラーム世界に残る巨人の墓の例を紹介したい。写真は、ウズベキスタンのサマルカンドで筆者が2016年に撮影したもので、ダニエルの墓と呼ばれている聖者廟である。実に、長さが18メートルもある。

ダニエル廟（サマルカンド、ウズベキスタン）山中由里子、2016年撮影

こうした巨大な聖者廟は、他にもオマーンのドファールのヨブ廟（４メートル）など[40]、中東各地に残っている。納められている骨が本当に巨大なものなのか、古生物の骨だとしたら何の生きものだったのか、発掘調査あるいはＸ線などで解明したいという好奇心にかられる。しかし、冒頭に挙げた「巨人の骨」同様に、神から与えられた超人的な力の表象として、これらの巨人の墓は今でも信仰の対象となっている。眠れる巨人を起こしてはならない。

注

＊　本論は次の口頭発表をもとに執筆した。「中世イスラーム世界における巨人像―ペルシア・アラビア語博物誌に見るアードの民」日本中世英語英文学会第 36 回全国大会企画シンポジウム「ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人族表象の変遷」（ウェブカンファレンス、2020 年 12 月 5 日～ 15 日配信）；「巨人の名残り―遺物をめぐる中世イスラーム世界の驚異譚と巨人」同志社大学一神教学際研究センター主催オンライン公開講演会（2022 年 1 月 23 日）。また本論は JSPS 科研費 17K02522、および 18H03573 の助成を受けた。

1　Norbert Vávra, „Riesenknochen von St. Stephan“ Objekt des Monats (March 29, 2022). <https:// bibliothek.univie.ac.at/sammlungen/objekt_des_monats/006386.html>

2　Franz Ernst Brückmann, *De Gigantum dentibus. Epistola itineraria XII*, (Wolfenbüttel, 1729), 4; Othenio Abel, *Vorzeitliche Tierreste im Deutschen Mythus, Brauchtum und Volksglauben* (Jena, G. Fischer, 1939); *Norbert* Vávra, „Ziegenklauen und Riesenknochen-Fossilien und Sagen,“ *Schriften des Vereins zur Verbreitung naturwissenschaftlicher Kenntnisse Wien* 142–146 (2008), 83–95.

3　Othenio Abel, *Vorzeitliche Tierreste*, n. 148.

4　『日亜対訳・注解　聖クルアーン』日本ムスリム協会、1982 年、188–189 頁。

5　ワフブ・イブン・ムナッビフ（654/5 ～没 725–737）、伝承者。

6　Thaʿlabī, Aḥmad ibn Muḥammad al-, *ʿArāʾis al-majālis fī qiṣaṣ al-anbiyā or “Lives of the Prophets”*, W. M. Brinner. trans. (Leiden, Brill, 2002), 105.

7　『日亜対訳・注解　聖クルアーン』日本ムスリム協会、1982 年、775 頁。

8　Peter Webb, “Iram,” in *Encyclopaedia of Islam, THREE,* (30 May 2022). <http://dx-1doi-1org-1ffotf5fo018d.emedia1.bsb-muenchen.de/10.1163/1573-3912_ei3_COM_32509>

9　Thaʿlabī, ʿArāʾis al-majālis fī qiṣaṣ al-anbiyā, 238–246.

10　Masʿūdī, *Les Prairies d’Or*, Charles Barbier de Meynard ed. & trans. (Paris, Imprimerie Impériale, 1865) vol. 4, 88–90.

11　Peter Webb, “Iram”.

12　『日亜対訳・注解　聖クルアーン』日本ムスリム協会、1982 年、129–130 頁。

13 アブドゥッラー・イブン・ウマル（610 頃～ 693）。予言者ムハンマドの教友で、ハディース（伝承、予言者の言行）の権威。

14 Thaʿlabī, ʿArāʾis al-majālis fī qiṣaṣ al-anbiyā, 399–401.

15 ヤツガシラはアラビア語で *hudhud* といい、『クルアーン』（27:20–24）にも、サバア（シバ）の女王についての知らせをスライマーン（ソロモン）にもたらす特別な鳥として登場する。

16 家島彦一「驚異としての北方―イブン・ファドラーンの記録を中心に」山中由里子編『〈驚異〉の文化史―中東とヨーロッパを中心に』名古屋大学出版会、2015 年、274–289 頁；イブン・ファドラーン『ヴォルガ・ブルガール旅行記』家島彦一訳注、平凡社、2009年；Paul Lunde and Caroline Stone trans., *Ibn Fadlān and the Land of Darkness: Arab Travellers in the Far North* (London: Penguin Books, 2012); Ibn Faḏlān, James E. Montgomery trans., *Mission to the Volga* (New York: New York University Press, 2017).

17 イブン・ファドラーン『ヴォルガ・ブルガール旅行記』家島彦一訳、192–194 頁。

18 ヤージュージュとマージュージュが獣のように交わり、魚のみ食べるという情報は、イスラーム世界に流布していた他の伝承と共通する。詳細は山中由里子『アレクサンドロス変相―古代から中世イスラームへ』名古屋大学出版会、2009 年、108–109、145–147 頁。

19 James Montgomery, “Spectral Armies, Snakes, and a Giant from Gog and Magog:Ibn Faḏlān as Eyewitness among the Volga Bulghārs,” *The Medieval History Journal* 9, no. 1 (2006), 63–87.

20 James Montgomery, op. cit., p. 71. 食人種や狂暴な女ばかりがいる女人国などについての語りも、貴重な資源に外部の人間を近寄らせないための警告という同様の役割を果たしていた可能性がある。山中由里子編『〈驚異〉の文化史―中東とヨーロッパを中心に』、460 頁。

21 亀谷学「中世イスラーム世界の旅行記と驚異譚」山中由里子編『〈驚異〉の文化史―中東とヨーロッパを中心に』名古屋大学出版会、2015 年、58–75 頁。

22 Paul Lunde and Caroline Stone trans., *Ibn Fadlān and the Land of Darkness*, p. 67.

23 Paul Lunde and Caroline Stone trans., *Ibn Fadlān and the Land of Darkness*, p. 84.

24 Paul Lunde and Caroline Stone trans., *Ibn Fadlān and the Land of Darkness*, pp. 86–87.

25 この作品に関する解説については次を参照。守川知子監訳、ペルシア語百科全書研究会訳注「ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー『被造物の驚異と万物の珍奇』（1）」『イスラーム世界研究』2-2、2009 年 3 月、198–204 頁；守川知子「天上・地上の驚異を編纂する―ペルシア語百科全書成立の一二世紀」山中由里子編『〈驚異〉の文化史―中東とヨーロッパを中心に』名古屋大学出版会、2015 年、76–94 頁。守川知子監訳、ペルシア語百科全書研究会訳注による本作の日本語訳は 2009 年から 2018 年の間、京都大学イスラーム地域研究センター発行の『イスラーム世界研究』http://hdl.handle.net/2433/70836 に 11 回にわたって連載され、完結している。ペルシア語校訂本は、Ṭūsī, *ʿAjāyib al-makhlūqāt va gharāyib al-mawjūdāt* (ed. M. Sotūde, Tehran, 1966)。

26 守川知子監訳、ペルシア語百科全書研究会訳注「ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー『被造物の驚異と万物の珍奇』(5)」『イスラーム世界研究』5 巻 1–2、2012 年 2 月、383–384 頁。

27 同上、482 頁。

28　守川知子監訳、ペルシア語百科全書研究会訳注「ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー『被造物の驚異と万物の珍奇』(7)」『イスラーム世界研究』7 巻、2014 年 3 月、510–511 頁。
29　同上、518 頁。
30　同上、518 頁。
31　同上、519 頁。
32　同上、519 頁。
33　守川知子監訳、ペルシア語百科全書研究会訳注「ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー『被造物の驚異と万物の珍奇』(8)」『イスラーム世界研究』8 巻、2015 年 3 月、297–302 頁。
34　同上、299 頁。
35　詳細については、次を参照。山中由里子「想像の地理と周縁の民族―女人族伝承の東西伝播」山中由里子編『〈驚異〉の文化史―中東とヨーロッパを中心に』名古屋大学出版会、2015 年、256–273 頁。
36　山中由里子「〈驚異〉を媒介する旅人」東アジア恠異学会編『怪異を媒介するもの』（アジア遊学 187）2015 年、287–292 頁；トゥースィーに含まれるアレクサンドロス関連の逸話についての詳細は、次を参照：Yuriko Yamanaka, “Authenticating the Incredible: Comparative Study of Narrative Strategies in Arabic and Persian *ʿajāʾib* Literature”, *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 45 (2018), 303–353.
37　アフラースィヤーブとは、イラン神話に登場するトゥーラーン王のことで、中央アジア付近の地域を指すトゥーラーンとバービル（バビロン）は地理的には一致しないのであるが、ここでは、昔の王様という程度の意味で使われているのであろう。
38　守川知子監訳、ペルシア語百科全書研究会訳注「ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー『被造物の驚異と万物の珍奇』(8)」『イスラーム世界研究』8 巻、2015 年 3 月、300–301 頁。
39　同上、301–302 頁。
40　松尾晶樹「イムラーンの墓とヨブの墓、モーゼと緑の男：オマーンと聖書の世界」松尾晶樹編『オマーンを知るための 55 章』明石書店、2018 年、42 頁。